

【映像】

## テーマ上映会「映像の学校」

会 期：2010年6月11日(金)～13日(日)、22日(火)～24日(木)[6日間]

会 場：アートスペースA

### □趣旨

今日、劇映画、ドキュメンタリーと共に、映像表現の主要なジャンルを形成する実験映画は、その歴史的な源流を1910～20年代に興隆したアヴァンギャルド映画（前衛映画）に求められる。この時代の映画はまだ音声のないサイレント作品であったが、既に表現として高度なレベルの達したものが数多く生まれていた。いわば、映像メディアを用いて、いかに表現するか、ということ自体が実験であるという、映画芸術の揺籃期と呼べる時代であるが、この頃に実験映画の概念も形成されていったことは、重要な事実といえるだろう。この上映会は、作品のタイトルや出演者、監督名などは知られていながら、今日、スクリーンで観る機会の少なくなったサイレント時代の名作と呼ばれる作品とともに、実験映画やビデオ・アートの傑作や重要作品を組み合わせた特集である。

サイレント映画の名作としては、今日の劇映画のフォーマットを作り上げ、“映画の父”とも称されるD・W・グリフィスと、スラップスティック・コメディ（ドタバタ喜劇）を極めたバスター・キートンの代表作を上映した。合わせて、「愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品」から、サイレント映画の方法論を用い新しい表現を志向した、天野天街『トワイライツ』（1994年）と寺嶋真里『アリスが落ちた穴の中 Dark Märchen Show!!』（2009年）を取り上げた。

実験映画からは、ダダの代表的な作家の一人、ハンス・リヒターが戦後に監督した『金で買える夢』（1946年）を選出した。この映画は、戦前と戦後の実験映画の結節点に位置する重要作品といえ、本プログラム中、過去と現在をつなぐ位置を占めることになる。ビデオ・アートからは、文化情報センター所蔵作品より、ナム・ジュン・パイクとビル・ヴィオラという、このジャンルを代表する2人の作家の代表作や重要作をセレクトした。

映像メディアのデジタル化は、映像表現においても、今、最も注目すべき問題であるが、CGなどで作られた映像が滑らかに動きすぎてしまい、かえって違和感を覚えてしまう、という指摘もある。こうした問題を克服するアプローチとして、デジタルとアナログの融合を試みて、今年5月に「オーバーハウゼン国際短編映画祭賞」を受賞し話題になっている、「オリジナル映像作品」の大山慶『HAND SOAP』（2008年）もリクエストの声に応え上映した。また、明日の映像表現を探るといふねらいから、この地域の有望な若手クリエイターの作品を集めた、愛知特別プログラム「愛知の新世代たち」を設け、当地に在住する若手作家や、大学等の映像コースで学ぶ学生や卒業生の新鮮な作品を取り上げた。

## □結果

1995年は映画生誕100年に当たり、当センターでリュミエールとメリエスという最初期の映画を回顧上映を行った他、今池の名古屋シネマテークではキートンの特集を組むなど、過去の映画を再見し、映画の歴史を考察する動きが強かった。しかしその後、こうした機運は薄れ、2000年以降、映画も、単に消費される情報の一つといった意味合いが強くなり、過去の映画に関する関心は全般的に薄くなった。特にサイレント映画は、音声を伴わないため古くさいものと見なされてしまい、名作であれ傑作であれ、それを改めて観ようという観客は少なくなったといえる。今回の企画では、グリフィス『散り行く花』(1919年)と、キートン『文化生活一週間』(1920年、共同監督：エディ・クライン)、『セブンチャンス』(1925年)を上映した。シニア層から、学生など20代の若者まで幅広い年齢の観客が訪れ、今日、サイレント映画に触れる貴重な機会として反響があったことを伺わせた。キートン作品は音楽が付いたサウンド版の上映であったが、グリフィス作品は完全な無音であったため、初めての鑑賞体験で大変緊張した、という声もあったが、作品に対しては概ね好評で、サイレント映画を改めて見直すきっかけを作ることが出来た、といえよう。

サイレント映画との関係から、無声映画の手法を現代に甦らせ、独自のユニークな映像表現を作り出した作例として、当センターの「オリジナル映像作品」より天野天街『トワイライト』(1994年)と寺嶋真里『アリスが落ちた穴の中 Dark Märchen Show!!』(2009年)を取り上げた。一般的には過去のものとなってしまったサイレント映画が、字幕の使用とかパントマイム的な演技など、今日の映像では失われた独自性を有しており、それゆえに現代の作家に刺激を与えることがある、という事例として、観客は興味を持ったようだ。

同じく「オリジナル映像作品」の大山慶『HAND SOAP』(2008年)も、「オーバーハウゼン国際短編映画祭賞」受賞後というタイミングもあり、多くの観客が訪れた。アニメーションと実写映像を融合した画面の質感は、大山が作り出した独自のもので、綿密に設計された音響効果と共に、その迫力に圧倒されたという声も聞くことが出来た。映像表現の過去から現在まで、実験映画を軸にして構成したプログラムは、映像アートの入門編としての役割を果たし、さらに新たな観客の開拓も実現した、といえるだろう。